報告

佐伯三十三観音巡り　大入島

吉田勝重
（会員　佐伯市女島）

第八回佐伯三十三観音巡りは、平成二十三年五月十三日（金）に行われた。佐伯三十三観音巡りの最終である。

今回は、佐伯港よりマリンバスをチャーターしての島巡りである。訪問先は第三十一番札所の普該庵と第三十二番所の大休庵の二カ所である。

佐伯港をでた船は、まず大入島を海上から眺めながら普該庵のある日向泊りに向かった。

船中で、今回の講師の一人である高盛西郷氏の話を聞いた。大入島は最近は過疎化が進み、現在の人口は九四二人だそうである。最盛期には四千人以上の人が住んでいたという。

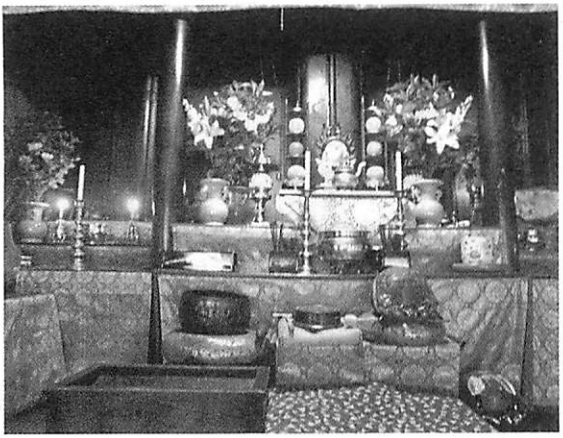
日向泊には「神の井」と呼ばれる名勝があり、神話の里として有名である。

第三十一番札所　普戒庵

御詠歌　くらきよを照らす誓や日に向ふ
浦のとまりの法のともしび

住職の話を聞く史談会会員〈日向泊浦〉

現在、この庵は「普該庵」と呼ばれている。本尊の観音様は、一年に三回開帳され、今回の観音様巡りでは見ることが出来なかった。



普該庵の本陣には、三体の厨子があるが中央が観音様、左右が脇侍の厨子である

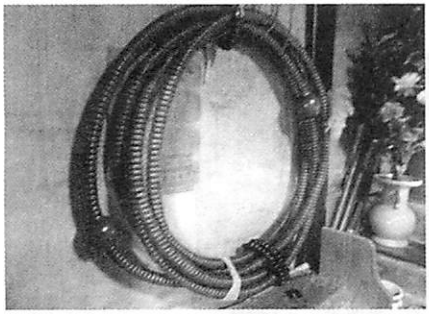
本陣には厨子の他に、阿弥陀像なども祀られていた。

この庵は、佐伯の潮谷寺の末庵であり、一月、五月、九月の十七日の午後から翌日にかけて潮谷寺の和尚により開帳される。

庵は潮谷寺の隠居所として作られ開山の時期は不詳となっている。三つの厨子ともに年三回の開帳である。

祭壇の右側には檀家の五十年忌の位牌がおかれている。庵の入口左手の壁には、この庵での百万遍講で使われる大きな数珠が掛けられていた。また境内には地蔵堂、大師堂、榎観音の祠がある。

さらに大入島四国八十八カ所の社が六基、庚申塔などの像が点在していた。



榎観音の祠

普該庵への道の手前にある祠は、地域の人々の手によりきれいに清掃され、今でも多くの人々から温かく迎えられている。信仰の篤さを感じる事が出きた。

私たち一行はこの普該庵のお参りを終え、再び船に乗り、次の訪問地である高松浦に向かった。

海上には「人形ばえ」と呼ばれる武士が上下（かみしも）を着た姿の岩を見ることが出来た。

この付近には万葉歌碑が建てられている。碑には「紅に染めし衣雨ふりて　にほいはすとも後ろはめやも」とある。豊後国白水郎の歌である。

大入島をめぐる県道は二十五年前に開通したが、開通までに十年の歳月がかかっている。今では大入島一周もできるようになった。一昔前までは山越えの道を行くか、船で行くかであった。

そのため、大入島四国八十八カ所めぐりも、山越えの道を通って行われていた。山腹のあちらこちらや山際の路上に、「第〇〇札所」とかかれた小さな祠があり、今も花が絶えない。

大師信仰が引き継がれている証拠である。

大師信仰の祠には、何番札所の他に石像と奉納した人の名前が彫り込まれている。また「四国八十八カ所巡拝同行二人」の札が置かれている所もあった。

高松浦は文化七年伊能忠敬が測量のため、この地に逗留し、三十二番札所の大休庵を本陣にしていたという。文書には「大入島測　久保浦白浜㊐印より初め、日向泊浦字夷浦二五浦、高松浦唐船波石字竜ケ鼻迄測、白浜白印より高松浦止宿迄一里二十丁二十三間、高松浦止前より竜

ケ岬迄九丁三十四間三尺合、白浜白印より竜ケ岬迄一里廿九丁五十七間三尺内除三十九間、先手は九ツ半後に、後手は八ツ前大入島高松浦着本陣、禅宗済家大休庵脇宿百姓十兵衛、この夜……」とある。

次の訪問地は、この三十二番札所大休庵である。

第三十二番札所　大休庵

御詠歌　高松浦の浜風音さえて
木末にはるる秋の夜の月

この大休庵は、養賢寺の末庵で別名観音堂と呼ばれている。本尊は聖観音菩薩坐像である。脇侍は弘法大師坐像と阿弥陀如来立像である。

建物は平成七年に新しく建て直されており真新しい。庵の開山の時期は不詳とされている。

この庵の本陣には江戸時代の過去帳が残されている。

また、境内には四国八十八カ所の霊場の祠や六地蔵尊や十一面観音像などがある。

庵の手前には魚鱗供養塔や無縫塔など十二基の石塔が見られる。

第三十二番札所　大休庵全景

江戸時代の古い過去帳
この過去帳からは、法名と年号
地区、氏名が読み取れる。

聖観音菩薩坐像

大休庵の境内には、享保八年の一石一字塔がある。正面には「南無多寶善逝　南無妙法蓮華経當知是處昴昊道場　南無釈迦雄尊」とあり、左右の面には「一天国家泰平當浦安全　子孫繁茂家施栄昌……」「奉書写一石一字妙水去華塔全絶　享保第八兌師天二月」とある。国の安全と浦の安全、子孫繁栄等を願っているようである。

その横には真新しい十一面観音像もある。この高松浦の大休庵の檀家は現在四〇軒あり、そのうち二軒は「いりこの網元」である。

昔は二十の網元と百五十人位の人々が檀家として住んでいたという。

大休庵の手前には一石一字大乗妙典塔や貞嶽塔と書かれた塔、享保十九年の當午経の石塔、天宗祖文首座禅師、隠降不浄首座禅師、四浦本教寺徒弟宝暦善上人洞覚老和尚、宝暦七世……一道禅味……書かれた無縫塔、魚鱗供養塔などが散在していた。

他にも大入島四国八十八カ所の祠、地蔵尊が多数祀られていた。

大休庵魚鱗供養塔

写真右端の石塔が魚鱗供養塔である。
文字は苔むしていて部分的にしか読めない。

正面　経王魚鱗供養塔
左面　〇〇放光…蠢動舎霊…龍鼎山養賢寺……
右面　豊後佐伯　干時明和三丙戌初冬二月
　　助忠……と読める。

この大休庵の訪問を最後に、私たちの三十三観音巡りは終了した。
本当は第三十三番目の札所、鶴屋三光院があるはずだが、あったと伝えられる佐伯市内の五所明神社の境内には見当たらない。
現在の五所明神社の神主さんの話でも、いつ頃まであって、いつからなくなったものか、わからなくなった時期も不明であるという。
私たちはこの訪問の後、自転車を借り残り半分の大入島探訪を実施した。
訪問した所は潮音軒と汐向庵の二つの庵、大正天皇駐蹕碑等である。

荒網代地区にある潮音庵

潮音庵は、資料によると臨済宗養賢寺の末庵となっていた。
しかし明治二十三年の寺院明細帳には海福寺末庵潮音軒となっている。海福寺は明治十五年の寺院明細帳では養賢寺末山と記載されていた。
本尊は観世音菩薩立像。脇侍左右とも厨子開扉せず不詳となっている。明治二十三年の記録では、宝暦十年（一七六〇）開祖欣西となっていた。

潮音庵境内には、大乗妙典一石一字塔と大乗妙典塔一石魚鱗一石供養と書かれた魚鱗供養塔があった。

大乗妙典一石一字塔には、宝暦十一辛巳歳五月の銘が、魚鱗供養塔の方には、明治十一年辛巳歳八月の銘が彫られていた。

潮音庵（軒）本陣

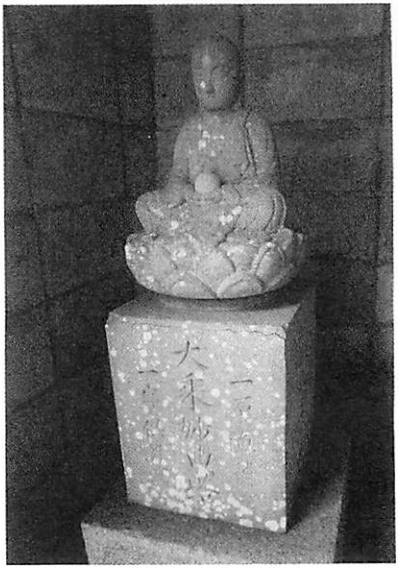
塩内浦の汐向庵

塩内浦にある汐向庵は、浄土宗潮谷寺の末庵として、明治二十三年の寺院明細帳に載っている。

建立年、開祖、本尊共に不明とある。

今回の三十三観音の資料には、別名普門庵とある。

本尊は厨子開扉せず不詳、脇侍は阿弥陀如来坐像、薬師如来立像と書かれていた。



大乗妙典塔一石魚鱗一字供養

本尊についての御縁起には「謹シミ敬テ観世音菩薩ノ本地ヲ案ズルニ西方浄土ニアリテハ願王阿彌陀佛ノ脇士トシテ如来ノ救世大慈悲ヲ示現シ玉フ故ニ三十三身ヲ應現シテ一切ノ衆生ヲ済度シ玉フコト自在ナリ。

塩内浦の汐向庵全景

忝ナクモ今當庵本尊ニ安置シ奉ル観世音菩薩ハ三百余年ノ古恰モ享保年間諸国遍正ノ六部行者周防ノ国某ナル人奉持ルトコロニシテ當塩内浦團塚弥左衛門宅ニ宿リ観音菩薩ノ尊像ヲ残シ立去リケルガ或夜観音菩薩弥左衛門枕辺ニ立タセ玉ヒテ丹火ノ口唇ヲ開キ夢中ニ告ケテ曰ク宿縁深重ニシテ今コノ地ニ留マリ普ク衆生ニ血縁シテ群生ヲ利生セントス。同人夢覚メテ感涙ニムセビ言フ所ヲ知ラズ忝ナクモ大悲ノ冥感ヲ蒙リ群萌利生ノ御告ヲ蒙ルコト我何ヲ以厚恩ニ敬ヒ奉ラント。忽チ村人ニ諮リテ山林

ヲ開拓シテ一宇ヲ建立シ是ヲ汐向庵ト称シ観音菩薩ノ尊像ヲ安置シ奉レリ弥左衛門遂ニ出家得度シテ僧名ヲ了心ト号シ本尊ニ奉仕スルコト二十有余年ニ及ビ正念往生ノ素懐ヲ遂ゲタリ。然リト雖モ衆生得度救世大慈悲ノ妙智力、今ニ至ルモ利益廣大ニシテ尊信崇敬ノ念変ルコトナシ。故ニ本日ヲトシ恭シク御開扉ノ法會ヲ修シ奉ル。希クバ大慈悲艦ヲ垂レ哀愍護念シ玉ハンコトヲ謹ンデ疏ス。」と書かれていた。

大正天皇駐蹕碑

大正天皇駐蹕碑全景

大入島石間の山の上に「大正天皇駐蹕碑」がある。この碑は、明治四十三年十月豊後水道における海軍大演習の時、当時皇太子であった大正天皇（東宮）が海軍中将として演習を親閲したことを記念して大正三年十月二十三日に豊南海部郡民により建てられたものである。

この日も花火が打ち上げられ満州、明石、鹿島などの連合艦隊が五十五隻集結したという。

この演習は昭和二年にも実施されている。

佐伯が軍港として使用された歴史の一コマを想起する事ができる。

この碑は五角形の形をしており、それぞれの面に「駐蹕記念大迫尚道謹書」「明治四十四年十月帝国海軍之演武於豊後水道也、其廿三日艦艇悉来泊於我佐伯湾、今上陛下時尚在東宮座乗富士艦而親閲之使登陟斯處而騁望湾形勢郡民深以為光栄也　乃建碑以傳之於無窮云誦」「大正三年十月廿三日南海部郡民恭建立」と書かれている。大迫尚道氏は日露戦争当時の陸軍大将である。

この駐蹕碑のある場所は、昔は「魚見峠」と呼ばれており魚の大群を見つける場でもあった。

そこには「いわしの群れを見つけ、網元、御三家の長老

頭が、木の枝を振り大声を出して網船を廻し合図を送っていた所である。」と書かれた札もある。

さらに周辺の山には、大入島四国八十八カ所、三十三カ所などの石塔が残されている。

大入島四国八十八カ所めぐりの石塔

この駐蹕碑から大入島小学校方面に続く尾根道は昔、国木田独歩が散策した道と言われていた。

この他にも、大入島には数多くの旧跡や文化遺産が残されている。

・神の井（日向泊）

神武天皇が東征の途中で寄港したと言う伝説を持つ井戸。山上には天孫降臨の神ニニギノ命を祀った天満社がある。神武天皇がこの地に船を繋ぎ、この岬に登ったという。

また、出航した神武天皇を船を見送った際、焚いた火明かりが、今も残っている行事「日向泊りのトンド」と言われている。

・産霊神社（守後）

旧毛利藩蔵書によると、安和元年（九六八）、六十三代冷泉天皇の御年豊後国海部郡石間沖に星斗の影間あり。守後浦に勧請したり、その後寛和五年（九八九＝永祚元年）神託により坂の浦嵐崎に移し、後守護に再度移したという。別名妙見神社。

この他にも多くの旧跡が残されていて面白い。